

## アダム・スミスの會

第一回公開講演會および第四回懇談會、一九四九年一月一二日、東京大學法經濟演習室および三七番教室

アダム・スミスの會の發端は、ことし獨立三〇周年をむかへる東大經濟學部の記念事業のひとつとして、同學部所藏のスミス藏書の一部の目錄編集がくわだてられたことにあつた。この編集のために東大經濟學部を中心とするスミス研究者（大内兵衛、矢内原忠雄、舞出長五郎、山田盛太郎、大河内一男、高橋誠一郎、大道安次郎、高島善哉の諸氏）の會合がかさねられていくうちに、スミスの經濟理論だけでなく全體としてのスミスを、またスミスだけでなくひろく一八世紀の社會と思想を研究するために、「アダム・スミスの會」をつくろうという氣運が生じてきた。そこで第四回の會合にあつて、前記八氏が發起人となつて、全國のスミス研究者三五名（發起人をふくむ）によびかけ、アダム・スミスの會の正式結成と、その最初の公開講演をおこなつたのである。當日は朝來の冷雨にもかかわらず、二一名の出席者をえて、盛會であつた。その氏名を列きよするならば、矢内原忠雄、舞出長五郎、大河内一男、遠藤洲吉、鈴木鴻一郎、横山正彦、大内力（以上東大）、高橋誠一郎、寺尾琢磨、遊部久藏（以上慶大）、堀經夫、大道安次郎（以上關

學）、久留間敏造（大原社研）、竹内謙二（中大）、末永茂喜（統計局）、越村信三郎（横濱大）、久保芳和（大阪商大）、大塚金之助、杉本榮一、高島善哉（一橋大）の諸氏、および筆者である。

ひるちかくからのこんだん會においては、會の名稱、機構、事業などが協議決定されたが、それによると、本會は會長をおかず、任期一年の世話人三名（本年度は矢内原、大河内、大道の三氏）をおき、事業としては月一回のこんだん會と年一回の講演會をおこない將來は機關誌スミス研究を發行することになつてゐる。名稱を「學會」としなかつたのは、スミスがフランス滞在中にしたしんだ一八世紀のパリの「サロン」のなごやかな性格を、この會にもたせようという意圖にもとづく。すでにフランスについては、フランス革命研究を中心とする「一八世紀研究者協會」が結成されているので、ここに「アダム・スミスの會」が、主にイギリスの一八世紀研究を目ざしてつくられたことにより、近代史における二大先進國の市民社會成立期の研究が、協同作業としておこなわれる可能性ができたのである。

公開講演の題目と概要はつぎのとおりであつた。

一 高橋誠一郎氏——アダム・スミスと社會主義者——

一九二六年にシカゴ大學で國富論出版一五〇年記念講演會がひらかれ、その内容が翌年出版された（J. M. Clark and others: Adam Smith, 1776-1926. Lectures to commemorate the sesquicentennial of the publication of "the Wealth

of Nations " Chicago 1927.) が、そのなかで Smith's theory of value and distribution (Paul H. Douglas) という章があつて、そこでダグラスは、リカード派社會主義は本來スミス派社會主義とよぶべきだと、のべている。その論きよは第一に、スミスにとつては勞働は價値の源泉だつたが、リカードにとつては價値の尺度にすぎないこと、第二に、リカード派社會主義者のなかで、直接にリカードをよんでいるのは、ホジスキンだけで、それに反してかかれはすべて、スミスをよんでいること、などである。もつとも、トムソンはかならずしもスミスのではなく、とくにかれの哲學的きそはベンタミズムであるが、逆にホジスキンは、むしろベンタムからロックへ、功利主義から自然法への復歸をしめして、そのいみではスミスのである。さらに、ブレイのリカード引用はジェイムズ・ミルやマカロクによつたらしいし、ホールはリカードの原理よりまゝ The effects of civilisation on the people of European states, 1805 において、勞働が富の源泉だといつてゐる。

たしかに、「土地の私有と資本の蓄積とにさきだつ原始状態においては、勞働の全生産物はその勞働者にぞくした」(國富論一篇八章) という思想から、勞働全利益權論をひきだすことは可能であつて、それと同様に、スミスの地代論や利潤論にも、社會主義のおよび資本主義的な兩要素がふくまれている。スミスのこつち中立的立場は、かれが産業革命以前の、すなわちマニユファクチュア時代の經濟學者であつたためであらう。か

れが、木綿産業にほとんど言及していないことからわかるように、かれは産業主義の經濟學者ではなく、勞資のはげしい對立をまだしらなかつたのである。

イギリスには、ウイクリフ、ジョン・ポール以來の共產主義思想があつたが、モアの社會改革的ユートウピアからベイコンの生産増大のユートウピアへの轉化を経て、スミスの時代にはこの思想はきわめてよわくなつてゐた。かれは世界の歴史を、勞働能率増加の歴史とみ、この増加が地主と資本家の發生以來もつともいぢるしいとして、現状を是認する。當時のイギリス文學の感傷主義(たとえばスターン)が、社會的悲慘をなげきはするが、除去しようとしなれないのと似て、スミスも、勞働者に同情はするが、悲慘は生産増加によつて容易に改善されるという、オプティミズムの立場をとつたのである。

二 矢内原忠雄氏——東大經濟學部所藏アダム・スミス藏書について——この藏書は、新渡戸博士がロンドンの Dulau & Co. から購入して、東大經濟學部の獨立記念に寄贈されたもので、一四一部三〇八冊からなり、そのなかにはスミス自身がつくらせた一七八一年の藏書目録(目下印刷準備中)もある。この三〇八冊だけからみても、スミスがきわめてひろい教養の持主であつたことがわかるが、さらに興味あることに、これらの本にはなんのかきこみもなく、かつ、スミスのこれからの引用は、けつしてげんみつに文字どおりではない。そこからスミスの本のよみかたを推測することもできる。(水田 洋)